

報 寺 敬 覚

8 月号



月刊 ● 敬覚寺報

〒177-0032 東京都練馬区谷原6-8-12
TEL 03(3996)1833 大江義宏

● チュニジア共和国 イシュケウル国立公園

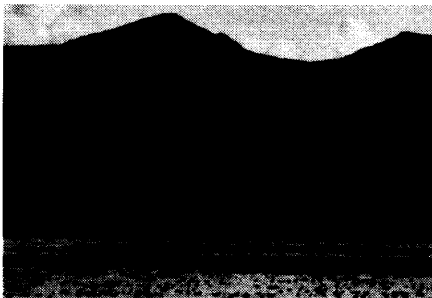
▼二〇〇二年八月一日▲

北アフリカの地中海に面するチュニジア共和国。首都チュニスの北西六十キロにある、ビゼルト県に、豊かな湖水をたたえるイシュケウル湖を中央にした国立公園があります。

太古の昔からヨーロッパ大陸の渡り鳥たちにとってこの地は格好の越冬地でした。この湿地帯には二十五万羽におよぶ鳥たちが羽を休めます。一九八〇年に世界遺産に登録され、国立公園のすべての地域が禁猟区に指定されています。湖をとりまく湿原地帯は唯一手つかずの貴重な自然が残されているところ。数世紀に渡って王家の私有地であったことも、狩猟による乱獲がなく、絶滅をまぬがれた種が保存されていることのわけでもあります。

うけつがれるもの うけついでいく心

—— 世界遺産 ——



イシュケウル湖



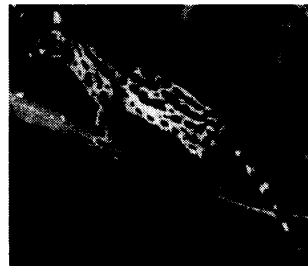
シュバシコウ



ハイイロガン



タテガミヤマアラシ



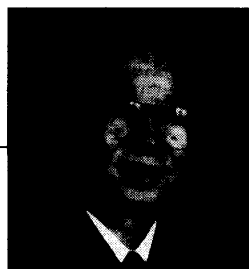
ヨーロッパジェネット



ハワイ開教・その感動

ハワイ開教区アイエア本願寺住職

川路 広美



日本は酷暑と台風の心配のある八月を迎えました
が、皆様方毎日如何お暮らしてございませうか。
先ずハワイより暑中のお見舞いを申し上げます。私
はハワイに於ける浄土真宗本願寺派の開教使生活四
十余年の間に、実に多くのすばらしい方々との出遇
いに恵まれました。そして人種や民族の異なる文化
や習慣にも染んで、嬉しい意義深い語り合いも重ね
ました。でもその出遇いの喜びは同時にそのような
すばらしい方々と別れるという淋しく悲しい記録も
残しました。現在私は、その貴重な体験の数々をま
とめたいと願っています。

その中には、死に直面した生身の人間との対話や、
多くの遺族と分ち合った汗と涙の旅路の山河等があ
ります。浄土真宗他力本願の救済を知らされていな
かったら、とても前進できない険しい道でした。

私は、親鸞聖人の和讃「无始流転の苦をすてて
无上涅槃を期すること 如来二種の廻向の 恩徳ま
ことに謝しがたし」（正像末和讃、三時讃の四十九
首目の一首）を大事に胸にいただいて、逞しく努力
を重ねさせていただきました。人に代わってもらえ
ない生身の生命を、今日とも知らず、明日とも知ら
ずに生きる人間にとって、娑婆は正に苦難の連続の
旅路であると云えます。それだけに、お念仏の生活
に基く信頼と尊敬に満ちあふれた社会の実現が望ま
れてなりません。

科学文明は確かに人間の生活を便利にしました。
しかし人間の心を安らかにしているとは云えませ
ん。

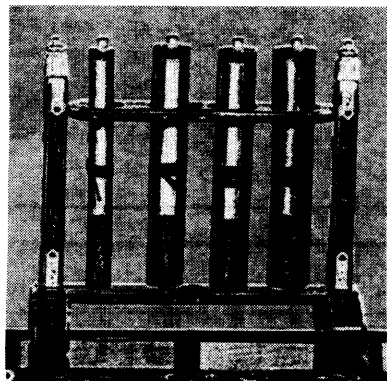
今日ハワイでも高令化が進んでいます。先月には
百七歳、百八歳の二名が亡くなりました。私共は
「安楽死」や「臓器移植」や「中絶」等に関する、
いろんな機関から意見が求められます。また最近
特に枕経ではなく、死に直面して苦しんでいる時に
読経の依頼をする家族がふえているようです。浄土
真宗の平生業成や、正定聚の教えを元氣なうちに深
く味得していただきたく、まじめな聞法の努力を切
望しています。

私は時々多くの宗教団体に関係している人々に出
合います。そのような人々の中には、宗教を保険の
ように考えている人もいます。信じている宗教が多
いほど、御利益も多いと云う考え方で、結論から云
いますと、宗教について、その大事な点が理解され
ていないと云うことになります。もっとはつきり申
し上げますと、百パーセント確かなものを持ってい
ないために、いつも不安と迷いに明け暮れていると
云う事になります。

親鸞聖人は、高僧和讃（曇鸞讃、五十三首目）に
「万行諸善の小路より 本願一実の大道に 帰入し
ぬれば涅槃の さとりはすなはちひらくなり」と述
べておられます。自力の計らいの万行諸善は小路で、
涅槃の浄土に至る事はむずかしい事を論され、他力
本願の救済の大道に帰入する事の大切さを教えてく
ださっている親鸞聖人の親切心が心の奥深く伝わっ
てまいります。姿勢を正して心の底から深く感謝せ
ずにはおられません。

浄土三部経

じょうどさんぶきょう



経子◇こんにちは、今日も朝から暑い日ですね。

住職◇そうですね。当分暑さが続くでしょう。風の通るこちらが涼しいですよ。

経子◇先月、お経の読み方のお話を伺いましたが、浄土真宗で使うお経についてお聞きします。

住職◇親鸞聖人が浄土真宗を開き、よりどころにされたお経は「浄土三部経」です。

経子◇「三部経」は、おじいさんの法事の時、お願いしたことがありますよ。

住職◇三部で一組のお経ですので「三部経」といいますが、正しくは「浄土三部経」とよぶのです。本堂にありますから、ご覧なさい。

経子◇あら、三部経なのに四本ありますよ。

住職◇右から

「佛説無量壽經卷上」

「佛説無量壽經卷下」

「佛説觀無量壽經」

四巻で「浄土三部経」です。

経子◇そうでしたか…。でも、お釈迦さまが説いたお経はたくさん有るのでしよう。

住職◇多くの大乗經典の中から、浄土の教えを過不足なく示したのが、この三部経です。

経子◇ほかにも「三部経」ってあるのですか。

住職◇他の宗派には「鎮護國家の三部経」「法華の三部経」というのがありますから正確には「浄土三部経」といいますよ。

経子◇よくわかりました。

住職◇右の二本は「仏説無量壽經上下」まとめ「大無量壽經」略して「大経」といいます。三本目が「観無量壽經」略して「観経」といいます。一番細いのが「阿彌陀經」略して「小経」といいます。

経子◇「大経・観経・小経」ですね。

住職◇そう。これを「浄土三部経」と名づけたのは、日本の仏教において、浄土教を独立させ、称名念仏によって誰でもお釈迦さまの根本精神を身につけることができる」と説いた法然上人です。親鸞聖人もまた師、法然上人の教えをうけつぎ、なによりも「浄土三部経」を重視されているのです。

経子◇浄土真宗では、ほかのお経は使わないのですか。

住職◇ほかのお経もお釈迦さまが説かれた大切な教えですが、阿彌陀さまの前でおつとめするお経は「浄土三部経」だけです。南無阿彌陀仏のありつたけを示しているお経なのですから。

経子◇「般若心経」はだめですか。

住職◇「自分で智慧を磨き、最高の悟りを得ます」と約束するお経ですから、阿彌陀さまの前では、恥ずかしくて使えません。般若の智慧は阿彌陀さまの働きの智慧であって私ものではないというのが浄土真宗です。

経子◇「讚佛偈」「重誓偈」が礼拝聖典にありますか。

住職◇これは「大経」にある偈文です。いつでも使えますよ。

経子◇ありがとうございます。

■大谷光照前門主様ご葬儀

去る七月十八日(木)御本山本願寺において、しめやかに、つつがなく、第二十三代門主大谷光照前門主様のお葬儀がとりおこなわれました。全国の門信徒を始めとして、親しまれたお人柄を偲んで多数の方々がご参集になりました。

つつしんで御報告申し上げます。

■八月十五日 戦没者追悼法要

一九四五年(昭和二十年)八月十五日、日本は第二次世界大戦の終戦を迎えました。早や五十七年を数えます。本山本願寺ではこの日、戦没者追悼法要が営まれます。九月には例年の通り、千鳥ヶ淵にて、戦没者追悼法要が営まれます。九月号にて詳細を御報告申し上げます。

又、話は少しそれますが、昭和二十年の八月十二日に現門主の大谷光真様はお誕生になつておられます。当門様も八月で五十七歳におなりになります。

■築地本願寺 盆おどり

例年たくさんのご参加をいただいています。なつかしい盆おどりが今年も行われます。皆様おさそいの上、お楽しみ下さい。

八月七日〜八月九日

お問い合わせは〇三―三五〇一―一一三二 築地本願寺まで

お仏具を考える

◆りん◆

お仏具の中でも最も親しまれているものではないかと思われれます。おりんは、「鳴らしもの」とも言われています。寺院や、家庭の中で音を出す仏具は数多くあります。大きなものから、梵鐘大鑿(だいきん)、喚鐘(かんしょう)、サハリ、音木、印鑿(いんきん)、そして「りん」です。りんは「キン」とも「カネ」とも申します。

おつとめの時に鳴らすものから、お仏飯をそなえたり、仏前に手を合わせるたびに鳴らすものではありません。おつとめの時にとり出して、座つて右側に置くようにします。又、一回が良いか、二回が良いかというきまりはありません。すがすがしい音色を聞き心を落ちつけて、これからおつとめをしますという「あいず」を鳴らすものです。



りんとりんふとん



本願寺派用りん台

ふとんの上に置いて良い音色が出る様に工夫されています。りんのお台にもお東用の正式な型とか、本願寺派の正式な型もありますが、それほどこだわらなく、丸型のものでよいです。

日常に使う仏教語

■^{ひどう}非道・^{にゅうどう}入道・^{いっこう}一向

「きょうの暑さは特にひどいね。入道雲がもくもく出たからひと雨降つて涼しくなるかと思つたのに、一向にその心配さえないよ。」

非道―「ひどい」は「非道い」からきたようです。道に反した所業は仏道に非ず(非道)であります。全くひどい、ひどすぎます。

入道―仏道に入れば入道ですが、頭を丸めても出家でない人を特に入道と呼びました。藤原道長入道・平清盛入道・北条時頼入道・三好清海入道など形は僧侶でも、姓を持ち在家のままの人は入道です。大入道・たこ入道もありますね。

一向―「まったく、全然」と同じに使いますが、一方向ということ、「ひたむき、ひたすら」が語源です。「一向専念無量寿仏」とあるように、浄土真宗は無量寿仏(阿弥陀仏)をひたすら一向にたのみとするのです。そのため、南無阿弥陀仏を称える浄土真宗の門徒を指して、一向宗徒と呼んだ時代もありました。